関西大学商学部
岩本明憲

推薦図書

下記の推薦図書は、僕がこれまで読んだ本の中で、大学 1 年生が（大学卒業までに）読む価値がある（読んだらきっと面白い）と思われる本です。ほとんどが文庫・新書版であり、安価に（1000 円以下で）手に入るものをピックアップしました。皆さんの個人的な好みに合致するかは分りませんが、一読の価値はあるかと思います。また、後半には、関西大学商学部の 5 つの専修の先生方に教えていただいた推薦図書を掲載しています。この夏休みに読破すると、夏休み明けには今とは違った自分になっているかもしれませんよ。

＜文学＞

・ **安部公房『第四間氷期』新潮文庫。**

あと 10 年長生きしていればノーベル文学賞を取っていただろうと言われている世界的作家の作品。40 年以上前の作品にもかかわらず、現代の環境問題のさらに先、はるか未来を見通したゾッとするような「SF 小説」。夏目漱石、川端康成、三島由紀夫などの日本の正統派文学が好きになれないという人はきっとハマるはず。同作家の他の作品としては**『他人の顔』（新潮文庫）**という「恋愛小説」が特にお勧め。自明のはずの「（自身の）存在」が揺さぶられ、どこにも足がつかない「無重力感」が味わえる。

・ **カミュー『ペスト』新潮文庫。**

ノーベル文学賞を獲った世界的に超有名な作家の代表作。不条理な世界に直面しても黙々とペストを尽くすことの大切さ、素晴らしさが肌で感じられる小説。その思想をさらに深く知りたい人には、同作家の**『シーシュポスの神話』（新潮文庫）**がお勧め。前半部は哲学書のような内容で難解だが、それを乗り越えたからこそ読める後半部の山を登るシーシュポスの逸話は、混沌とした現代社会を力強く生き抜く勇気をくれるはず。より無機質な不条理の世界に浸りたいという人は**カフカ**の**『城』**や**『審判』**がお勧めかも。ただし、個人的にはカフカの作品は苦手です。

・ **ガルシア・マルケス『予告された殺人の記録』新潮文庫。**

『百年の孤独』で有名なノーベル賞作家の中編小説。とある町で起こった殺人事件という「完成図」が最初に提示され、ジグソーパズルの各ピースが少しずつ埋まっていくかのように、本当の全体像が浮かび上がってくるという「逆推理小説」。犯人探しの推理小説に興味を持てない人には特にお勧め。興奮のうちに一日で読めてしまう。

・ **ドストエフスキー『罪と罰』岩波文庫。**（または新潮文庫）

言わずと知れた世界の名作。長編ですが、100 ページくらいまで頑張って読むと、あとは止まらなくなります。同作家の**『カラマーゾフの兄弟』（岩波文庫）**はさらにスケールが大きく、大学生への推薦書としてしばしば紹介される超大作。両作品とも社会人になったら絶対に読めなくなるので、是非、学生時代に読んで欲しい。

・ **ゴンチャロフ『オブローモフ』岩波文庫。**

文庫版で 1000 ページを超える長編のロシア文学。しかも、最初の 200 ページほどは、主人公オブローモフは朝起きてベッドでぐうたらしたままという異色の小説。そんなオブローモフが知的で情熱的な女性オリガに出会ったとき、激しくそして美しい恋の物語が幕を明ける。情熱的で内気なロマンティストにお勧め。ただし読了するのに最低 3 カ月はかかる。書店ではあまり見かけないが、数年前に復刊されたので、注文すれば在庫はまだあるはず。

＜教養＞

・ **カール・ヴァン・ウォルフレン『日本の権力構造』早川書房。**

日本という国家の権力構造とその問題点をリアルに知るための好著。発刊から 15 年以上が経過してしまったが、日本が抱える構造的問題は当時からあまり変わっていないことがよく分かる。分厚い本だが、ニュースや教科書に登場する世界の裏話が盛りだくさんなので、スムーズに読める。

・ **池田清彦『環境問題のウソ』ちくまプリマー新書。**

一応知っておいたほうがいいかもしれない話。目から鱗が落ちることは間違いないが、世のエコブームがあほらしくなってしまうのが難点。

・ **谷岡一郎『ツキの法則ー「賭け方」と「勝敗」の科学』PHP 新書。**

大阪商業大学の学長にして「ギャンブル学」の専門家による「ギャンブル解説本」。ただし、それは表向きで、社会における統計（学）の重要性がよく分かる必読本。実は、カジノや競馬よりも宝くじのほうがはるかに「ぼったくり」だって知っていましたか？

＜社会科学＞

・ **谷岡一郎『「社会調査」のウソ—リサーチ・リテラシーのすすめ』文春新書。**

学期末レポートの課題図書でしたが、どうでしたか？ちなみに同著者による**『データはウソをつくー科学的な社会調査の方法』（ちくまプリマー新書）**はこの本の応用編でこれまた必読。

・ **ダレル・ハフ『統計でウソをつく法ー数式を使わない統計学入門』講談社ブルーバックス。**

40 年以上前に出版されたが、未だに増刷を続ける古典的統計ガイドブック。「統計学入門」と聞くと難しそうだが、中身は簡単で分かりやすい。統計でウソがつけるようになる以上に、ウソに騙されなくなることが学生にとってはメリット。社会人になったら企画書などでグラフやデータを使う必要があるでしょうから、本棚にずっと置いておける。

＜自然科学＞

文系だからといって自然（科学）について全く興味を持たない必要はありません。素人にも読みやすくかつ面白い本が最近は出版されています。

・ **福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書。**

狂牛病とその原因物質と考えられているプリオン蛋白質を研究している生物学者による最近のベストセラー本。理系の研究者とは思えないほど文章が上手い。科学的な論証の手続きが実例を用いて説明されているので、将来きちんとした卒論を書きたいと考えている文系学生にも非常に勉強になる。同著者によるによる**『プリオン説は本当か』（講談社ブルーバックス）**も科学版「ミステリー小説」として非常に面白い。自説をどのように補強すればよいのか、「状況証拠」がどの程度有効な証拠になり得るのか、がリアルに分かるという意味で文系の学生にも勉強になることが非常に多い。

・ **竹内薫『世界が変わる現代物理学』ちくま新書。**

北野武のテレビ番組にも出演しているサイエンスライターによる量子力学の入門書。物理学や量子力学と聞くといかにも難しそうだが、その「不思議な世界」が平易に説明されていて、まさしく「世界が変わる」感覚を体験できる。この本を読了すると、ノーベル物理学賞の受賞者であり文筆家としても名高い**朝永振一郎の『鏡の中の物理学』（講談社学術文庫）**が読めるようになる。

＜経済＞

・ **スティーヴン･ランズバーグ『ランチタイムの経済学－日常生活の謎を優しく解き明かす』日経ビジネス人文庫。**

タイトルにあるように、日常生活の謎が経済学を用いて解き明かされている。タイトルには「優しく」とあるが、経済学を学んだことのない学生にはちょっと説明が不親切かも。でも内容の 7 割くらい理解できればそれで十分にためになるし、各トピックの分析はユーモラスで読んでいて非常に面白い。

・ **スティーヴン・レヴィット＆スティーヴン・ダブナー『ヤバイ経済学―増補改訂版』東洋経済新報社。**

これは文庫・新書ではないが、2000 円でお釣りがくる数年前のベストセラー。楽しみながら経済学が勉強できる。

・ **伊藤元重『入門経済学－第 3 版』日本評論社。**

筆者は WBS にも出演している東大教授の経済学者。経済学を真面目にかつ独学で勉強したい人には最適のテキスト。これを読めば経済学に対する苦手意識はほぼなくなるし、上で紹介した本も楽に読めるようになる。ただし 3150 円。もっと安価で、かつ気軽に経済を勉強したい人は、同著者による**『はじめての経済学』（日経文庫→注：実際には新書）**がお勧め。上下巻合わせて 1500 円ほど。古本で買えば 2、3 百円で手に入る。ちなみに、経済学を手っ取り早く勉強したい人は、経済学部の「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」の授業にもぐることがお勧め。

・ **梶井厚志『戦略的思考の技術－ゲーム理論を実践する』中公新書。**

就職活動を有利に進めるのも、商談をまとめるのも、結婚相手をゲットするのも？「戦略」が不可欠。つまり、相手の意図や狙い、自分と相手を取り巻く状況などを考えずに無

謀に突進するだけではうまくいかないということです（盲目な恋が成就することも間々あるでしょうが…）。この本では戦略の策定や実行に最低限必要な考え方（戦略的思考）がキーワード別に比較的平易に解説されている。「インセンティブ」「コミットメント」「モラルハザード」など、ビジネスの現場でもよく使われる基本的用語が使いこなせるようになるだけでも一読の価値があるでしょう。同著者による**『故事成語で分かる経済学のキーワード』（中公新書）**と併せて読めば、教養レベルとしての経済学の知識はかなり手に入る。前者はシンプル、後者はユーモラスという長所がある。

- **松原望『ゲームとしての社会戦略－計量社会経済科学で何がわかるか』丸善ライブラリー。**
  梶井厚志、谷岡一郎両氏の本をひととおり読み終えた人にお勧めの好著。非常に薄い本だが中身はギッシリ。予備知識なしに読むのはちょっと難しいかも。

＜マーケティング＞

マーケティング系統の専門演習（陶山先生・川上先生・岸谷先生・馬場先生・岩本による演習）を 2 年生の秋学期または 3 年生になってから履修したいと考えている学生は、下記のテキストであらかじめ勉強しておくと困らないと思います。

- **薄井和夫『初めて学ぶマーケティング［応用編］－マーケティングと現代社会』大月書店。**
- **薄井和夫『初めて学ぶマーケティング［基礎編］－現代のマーケティング戦略』大月書店。**

2 冊で 4000 円。マーケティングのテキストは腐るほどありますが、非常に読みやすい文体で、また重要なトピックがコンパクトにまとまっているのでお勧め。さらにマーケティングの各トピック（ブランド、製品、広告、流通、価格など）について勉強したい学生は、各トピックについて有斐閣（ゆうひかく）という出版社から出ている**「有斐閣アルマシリーズ」**がお勧め。どのトピックについても各分野の代表的・著名な研究者が初学者向けに執筆しており、2000 円以下で手に入れることができる。ただしテキストチックなので少々退屈かも。

＜英語＞

中学生になって初めての英語のテストの最中に「アイドントノー（I don't Know.）」と「ノーアイドント（No, I don't.）」の違いに思い悩んで以来、いまだに英語は苦手（嫌い）です。大学に入ったら絶対に英語なんか辞めてやる！と公言していたにもかかわらず、何の因果か、いまだに英語を勉強せざるを得ない環境にいます。そこで、英語が嫌いな and/or 苦手な人間にも少しは英語が理解できるようにしてくれると思われる著作を紹介します。

- **マークピーターセン『日本人の英語』岩波新書。**
  大学時代の恩師（英文学が専門の先生）に勧められた本なので間違いないと思います。日本人がよく間違う、または違いがよく分からない主要な表現や文法項目についてコンパクトかつ軽妙なテンポで説明されていてとても読みやすいです。これと共通した問題意識で書かれた本としては、**ジェイムズ・H・M・ウェブ『日本人に共通する英語のミス矯正ド**

リル』ジャパンタイムズがあります。こちらはタイトル通り「ドリル形式」になっているので、『日本人の英語』を読了後、練習問題を解いていくと、今までのモヤモヤのかなりの部分が解消するはずです。

- **ランガーメール編集部『a と the の物語』ランガーメール。**
- **ランガーメール編集部『THE がよくわかる本』ランガーメール。**

中学校 2 年生になって、a と the の使い分け方がさっぱり分からず、英語の先生に質問しても適当に誤魔化されて、さらに英語が嫌いになりました。大学生になって書店でこの 2 冊を見つけて読み、「なんでこれを早く教えてくれなかったの！」と中学時代の英語の教師を恨んだのと同時に、「この本に書かれているようなことは、中高の英語の教師も知らないから教えられなかったのだ」と妙に納得した記憶があります。

英語を読んだり聞いたり話したりしているとき、a がついているか（a をつけるか）、the がついているか（the をつけるか）、複数形になっているか（複数形にするか）で文意が大きく変わってしまうことを実感します。逆に、その（a や the や複数形の）含意が分かると、驚くほど英語が理解できるようになるという経験をしました。2 冊とも、本文中の日本語の一部はたどたどしく、時折出てくるアメリカンジョークのような言い回しもたまに意味不明なのですが、そうしたマイナス面を補って余りあるほどの「目から鱗」の内容だと思います。

＜その他＞

- **石島洋一『決算書がおもしろいほどわかる本：新会計基準対応版』PHP 文庫。**

会計にはそれほど興味はないけど、最低限のことは知っておきたいと考えている人にお勧め。前半部で解説された会計概念を用いて、後半部で実際の企業の財務分析がわかりやすく紹介・説明されている。会計の専門家ではない僕にはとても読みやすい本でした。

- **中山真敬『たった 3 秒のパソコン術』知的生き方文庫。**

ちょっとしたパソコンのコツが書かれていて結構勉強になります。**戸田覚『仕事にスグ効くパソコン術』ソフト文庫**と併せて読むと、ある程度ノウハウが蓄積します。

他の先生の推薦図書

今回のリスト作成にあたり、僕の専攻および個人的な趣味・嗜好では偏りが生じると考え、商学部の他の先生にもご協力を頂きました。僕も読んだことのない本が多いのですが、可能な限り簡単なコメントをつけておきます。

＜川上智子先生（マネジメント専修）＞

- **首藤明敏(2009)『ぶれない経営』ダイヤモンド社。**

- **柳井正（2006）『一勝九敗』新潮文庫。**
- **松田公太（2006）『すべては一杯のコーヒーから』新潮文庫。**
- **澤田秀雄（2005）『HIS　机２つ、電話１本からの冒険』日本経済新聞社。**

四冊とも、日本を代表する起業家のインタビューや自伝、経営論など。起業に関心がある学生はもちろんですが、関心がない人も、これらの本を読むとその魅力に気づくかもしれません。

一冊目は、ビームス、吉田カバン、レストランひらまつ、ジャパネットたかたなど、日本で独自のブランドを育てた８社の経営者がその秘訣を語っている。

二冊目は、いわずと知れたユニクロの創業者の「失敗の歴史」。起業家というと成功し続けているイメージがあるかもしれませんが、そうではなく、むしろチャレンジし続けること、そして失敗を糧にしてそれを乗り越えることが重要であるということがよく分かるはず。ちなみに、僕は「二勝五敗三引き分け」くらいが目標。勝ち続けるのはなかなか難しいのです。

三冊目は、コーヒーチェーンである TULLY'S COFFEE、四冊目は、旅行会社 HIS の創業者による起業物語。起業というと、遠い世界に思えるかもしれませんが、彼らにとっても、最初はきっと遠い世界だったはず。

＜西村成弘先生（マネジメント専修）＞

- **佐野眞一『カリスマ：中内功とダイエーの「戦後」』（上・下）　新潮文庫。**
- **チャールズ・フィッシュマン著　（三本木亮訳）　『ウォルマートに呑みこまれる世界：「いつも低価格」の裏側で何が起きているのか』ダイヤモンド社。**
- **松本清張『日本の黒い霧』（上・下）　文春文庫。**
- **柴田哲孝『下山事件：最後の証言』祥伝社。**

西村先生からのコメント「前２件が流通系です。後ろ２件は、黒い霧系です。ひょっとしたらダイエーの本も黒い霧系かも知れませんが。」どれも戦後日本の（または巨大企業の）「暗部」にスポットライトを当てた作品群。裏事情に通じることは、世の中の現状・動向を知る上で欠かせません。

＜馬場一先生（流通専修）＞

- **ヤン・エルスター著、海野道郎訳（1997）『社会科学の道具箱―合理的選択理論入門』ハーベスト社。**

社会を分析・研究する上でカギとなるファクター（要因）とその基本的な分析方法（方法論）について、非常にコンパクトにまとめられている。1 年生には少し難しいかもしれませんが、3 年生になる前、専門演習を選ぶ前までには読んでおいて欲しい本。ただし入

手が困難なのが難点。幸い、関大の図書館には所蔵があります。

＜田村香月子先生（ファイナンス専修）＞

- **飯久保廣嗣『質問力ー論理的に「考える」ためのトレーニング』日経ビジネス人文庫。**
- **石田衣良『波のうえの魔術師』文春文庫。**
- **村上龍『希望の国のエクソダス』文春文庫。**

一冊目は、基礎演習のプレゼンでうまく質問できない学生にお勧めであるだけでなく、社会人になっていずれ部下ができたときにも使える「ビジネス書」。論理的な質問（ツッコミ）が他人にだけなく、自分自身（のアウトプットやパフォーマンス）にもできるようになったとき、皆さんの成長の速度は格段に速くなるでしょう。

二冊目はベストセラー作家による「経済エンターテイメント小説」。株式市場や金融システム、さらには「マネーゲーム」について自然と知識が得られ、興味が持てるようになりそうです。

三冊目は、経済問題にも明るい人気作家の作品。村上龍は月曜 22 時からテレビ大阪で放送中の経済番組「カンブリア宮殿」のメイン司会者です。

＜木村麻子先生（会計専修）＞

- **友岡賛『歴史にふれる会計学』有斐閣アルマ。**
- **新田次郎『八甲田山死の彷徨』新潮文庫。**
- **マックス・ウェーバー『職業としての学問』岩波文庫。**
- **中島義道『たまたま地上にぼくは生まれた』ちくま文庫。**

一冊目は会計学のテキスト。会計専修の先生の推薦図書だけに説得力がありますね。

二冊目は、有名な「八甲田山遭難事件」をテーマにした小説。極限状態に置かれた組織と人間のドラマがリアルに描かれている。ちなみに作者は、『国家の品格』で超有名になった数学者、藤原正彦の父親。蛇足ですが、新潮文庫から出ている藤原正彦のエッセー集は、なかなか面白い。

三冊目は、大学 1 年生が読むべき超代表的「古典」。マックス・ウェーバーは 20 世紀を代表する（おそらく世界で三本の指に入る）「社会科学者」。大学で学ぶ「学問」と社会人になって求められる「実践」の関係が説明されている。大学で堅苦しい学問を学ぶ意義を見いだせない人には特にお勧め。非常に薄い本なので、少々堅い内容だが頑張れば読みきれる。100 年以上前の「古典」をなぜ今更読む必要があるのかと疑問に思う人は、**丸山眞男『「文明論之概略」を読む』（岩波新書）**の上巻収録の「序：古典からどう学ぶか」を是非読んで欲しい。丸山眞男は、戦後日本を代表する知識人であり政治思想史の大家。この本も本当は是非読んで欲しい本だが、日本史や思想史に関心のない人にはつらいだけかも。

四冊目は、「戦う哲学者」による論考集。作者の作品は「空気を読めない」「空気を読むことに疲れた」人には心強い応援歌になるはず。先に紹介した藤原正彦とともに、良い意味でも悪い意味でも「頑固（偏屈）オヤジ」なので好き嫌いは分かれるかも。ただし、二人とも苦労人・努力家であり、留学先の海外での苦労話などはとても興味深い。

＜岡本真由美先生（国際ビジネス専修）＞

- **則定隆男『ビジネスの「コトバ学」』（日経プレミアシリーズ）、日本経済新聞出版社。**
- **亀田尚己『国際ビジネスコミュニケーション再考』文眞堂。**
- **中邑光男『基礎から学ぶ英語ビジネス・ライティング』研究社。**
- **ロッシェル・カップ、荻原秀介『ビジネス・ライティングの英語表現』The Japan Times。**
- **鶴田知佳子、柴田真一『リーダーの英語』コスモピア。**
- **グローバル・ラスクフォース『MBA 速読英語』大和書房。**
- **川端淳司『新徹底攻略 TOEIC TEST 単語』テイエス企画。**
- **菊間ひろみ『これだけ！TOEIC テスト総合対策 初めて~650 点』あさ出版。**

国際ビジネスの専門家であり、英語（教育）に精通されている岡本先生の推薦図書です。無理を言って TOEIC の参考書まで教えてもらいました。

最初の三冊は、それぞれ関西学院大学、同志社大学、関西大学の国際ビジネス英語のプロフェッショナルによる基礎的で分かりやすい解説書です。亀田先生は、7 月 2 日に関西大学で講演をして頂いた実務経験豊富な英語の達人です。

四冊目は、ビジネス英語の実践的な解説書で、使えるテキストのようです。五冊目の鶴見・柴田両氏のコンビは評判のいいテキストを多く執筆しています。六冊目以降は、英語の勉強に即時的に使えそうなテキストです。特に最後の本は、初めて TOEIC を受験する人にとって頼りになるテキストのようです。僕も知らなかったテキストばかりですが、英語の専門家の先生の推薦の本だけに説得力がありますね。是非、早めに TOEIC を受けて、自分の現在の実力を知り、これらの著書やテキストを使って真剣に英語の勉強に取り組んでもらいたいと思います。夏休みの予定がない人は、これらの本を頼りに「英語漬け」の夏休みを過ごせば、秋学期には英語力が格段にアップしていると思いますよ。